

資料 3

我が国における水中遺跡の
活用に関する取組

企画展「UMIAGARI—海揚げり—日本海に沈んだ陶磁器」

【期間】 平成27年12月19日～平成28年3月21日

【会場】 新潟県立歴史博物館

【内容】 新潟県の海域から引き揚げられた資料について、新潟県海揚げり陶磁器研究会（代表・寺崎裕助氏）により悉皆調査されたのは、平成21年からのことであった。平成24年に報告書がまとめられ、錨や石仏、石器等、陶磁器以外にも若干含み、200点以上の資料の存在が明らかとなった。本企画展は、その調査成果を活用して開催したものであり、特に陶磁器を中心として展示するものとした。副題で「陶磁器」と示した所以である。

しかし本企画展の最大の特徴は、「陶磁器」にあるのではない。さらに、水中考古学や水中遺跡、水中文化遺産のイメージと言うよりも、それら陶磁器類が海底に沈んでいたものであり、時を経ての偶然の発見物であるということを出発点とする、ということであった。そして、「海揚げり」という、あまり聞きなれないかもしれないキーワードを避けることなく、展示で如何に示すことができるかに挑んだと言っても良い。

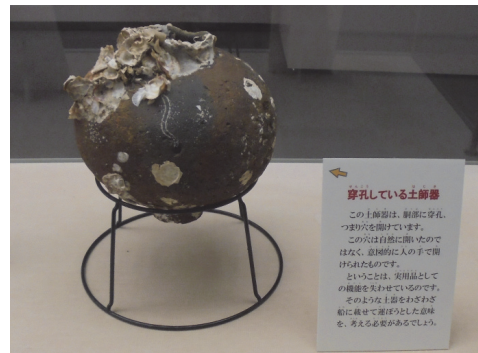
それは、それら海揚げり資料の来歴による。すなわち、底引き網漁等によって偶然見つかったものであり、水中遺跡という認識のもとに引き揚げられたものではないからである。つまり、「モノ」の展示（陶磁器の展覧会）と言うより、「コト」の展示（沈んだという事実を示し、その理由を考える展覧会）を目指したのであった。

そのために採用した展示手法が、展示室を1万分の1の地図に見立てる方法である。展示室内に黄色のテープで海岸線を描き、資料の沈んでいた位置を、自らが地図上に立って体感することで理解できるように、ケース配置にも工夫を凝らした。それらによって、粟島の西方沖からは灰釉陶器が、また、縄文土器が弥彦～佐渡（つまり最短距離）の間から揚がっていることなどの諸相が、相応に理解されたと考えている。つまりそれは、単に遺跡や遺物の存在を示すだけではなく、水中にあったという事実への理解を促すものだったのである。

「モノ」の展示を「コト」の展示にすることができた本企画展は、海揚げりの資料を活かしていくヒントを提示できたのではないかと思う。
(新潟県立歴史博物館 山本哲也)



1万分の1の地図に見立てて展示室を構成



穿孔土師器
(難破説以外に奉納説を説明)

琵琶湖湖底遺跡の活用

【内容】 昭和48年以來の琵琶湖における水中遺跡発掘調査の成果については、県民の関心が高い琵琶湖との関連により、博物館や資料館を中心に展示公開され、普及啓発が積極的に行われてきた。

1. 滋賀県立琵琶湖博物館での活用

琵琶湖博物館では、平成8年の開設以来、常設展B展示室で「人と琵琶湖の歴史」を展示している。ここでは、琵琶湖のまわりに人間が住みはじめて以来、人間は湖と共存し、湖を利用し、また開発してきた歴史と、今日まで続いている人間と琵琶湖との関わりを湖底遺跡、湖上交通、漁撈、治水・利水という4つのテーマで展示している。

水中遺跡のコーナーでは、「琵琶湖の湖底遺跡」として、水中遺跡の調査方法を写真と模型で展示。「葛籠尾崎湖底遺跡の謎」では深い湖底に沈む縄文時代から平安時代にかけての土器の様子をジオラマで紹介。「遺跡の調査と方法」では、発掘調査の成果とあわせて、調査現場を栗津湖底遺跡のジオラマで再現して紹介している。さらに、「湖と古代交通」のテーマでは、水中で発見された古代勢多橋の橋脚の調査の様子を実物大の模型で紹介している。



栗津湖底遺跡のジオラマ展



遺構から復元された勢多橋

2. 滋賀県立安土城考古博物館での活用

琵琶湖総合開発による発掘調査の出土遺物は、館に併設された埋蔵文化財センター水資源関係整理室で整理した。記録資料、出土遺物はこの水資源関係収蔵庫で一括保管管理していることから、これまでに常設展示も含め、多くの水中遺跡に関する講座や展示を実施してきている。常設展示では「琵琶湖の湖底遺跡」のコーナーを設け、企画展は、開館以来、「水中考古学の世界」「湖底遺跡が語る湖底2万年の歴史」など8回開催され、延べ6万人を超える観覧者を得ている。



水中遺跡に関する展示図録



水中遺跡に関する常設展示

3. 滋賀県立埋蔵文化財センターでの活用

埋蔵文化財センターは「ずっと昔の琵琶湖のほとり」（平成 27 年 9 月～28 年 7 月）など、水中遺跡の情報公開や展示を数多く行っている。また、粟津湖底遺跡で取り上げられ、データ集計が終わった古代セタシジミは、実物に触れるための学校教材や体験学習として活用を図っている。

4. 葛籠尾崎湖底遺跡資料館での活用

葛籠尾崎湖底遺跡では琵琶湖の沖合 600～700m、水深 10～70mの湖底から、これまで縄文土器や弥生土器、土師器等、多くの遺物が水中から引き揚げられている。資料館（長浜市湖北町尾上公民館）では、これら引き揚げられた遺物を逸散させないように一括管理し、地域で活用を図るため遺跡の紹介や遺物の公開・展示を行っている。

5. 石山観光会館での活用

石山貝塚の隣接地にある一般社団法人石山観光会館では、三大淡水貝塚「石山貝塚・蛭谷貝塚・粟津湖底貝塚」の情報や貝塚はぎとりのパネル展示等を行い、講演会の開催やイベントの開催、ボランティアガイドによる案内等を行っている。平成 23 年には近江シジミ研究会、県・市・財団の連携で講演会や展示、粟津湖底貝塚船上見学会、シジミ採り体験やシジミ食体験等が開催され好評を得た。

（滋賀県教育委員会 木戸雅寿）



葛籠尾崎湖底遺跡の引揚げ遺物の展示図



出土品（縄文時代中期のセタシジミ）の活用
（データ化後、学習用に配布）

エルトゥールル・プロジェクト

【期間】 平成 19 年～平成 22 年、平成 27 年再開

【会場】 串本町トルコ記念館 和歌山県立博物館ほか

【内容】 エルトゥールル号は、明治天皇への答礼の親善使節としてオスマン帝国から日本に派遣された。明治天皇に謁見後に帰国の途についたが、明治 23（1890）年 9 月 16 日に和歌山県東牟婁郡大島村（現串本町檜野）檜野崎沖で台風に遭遇し、船甲羅岩で座礁した。この事故で乗組員 580 人以上が死亡したものの、地元住民による救助活動と献身的な介護で 69 名がトルコに生還した。日本近海での外国船籍による大規模海難事故となったが、外国人への義援金活動を行うなど、トルコ・日本の友好の原点となった。平成 27 年にはトルコ・日本友好 125 周年記念として事故が映画化された。和歌山県教育委員会は、文化財的価値の調査研究を行って平成 25 年に報告書を刊行した。これらに先立ち、平成 19 年にトルコ海洋考古学研究所を中心とするエルトゥールル・プロジェクトがスタートした。プロジェクトはエルトゥールル号沈没品の引揚げを目的とし、平成 19 年に音波探査と金属探知、平成 20～22 年に潜水による発掘調査が実施された。約 8,000 点の引揚げ品は、串本町内やトルコの研究所で保存処理が現在も継続的に行われている。なお、トルコ政府や同海軍はプロジェクトには直接関与していない。

保存処理が完了した引揚げ品は、トルコ海軍の要請に基づきトルコ記念館で展示される予定である。一部は平成 27 年 6 月のトルコ記念館リニューアルに際して、常設展示されている。これ以前にもトルコ・ボドルム市、メルシン市、アランヤ市、日本・大阪市、和歌山市、串本町のほか駐日トルコ大使館でも引揚げ品が展示された。

串本町は、プロジェクトに対しリサーチセンター設置、ボランティア等募集、国際交流事業として補助金交付等の継続的な支援を行っている。これに対し、プロジェクト側はリサーチセンターでの町内小中学生の保存処理体験や県内の高校等での出前講座を実施するなど交流を図っている。現在も交流関係は継続しており、今後もその友好的な関係が期待される。

（公益財団法人和歌山県文化財センター 藤井幸司）



トルコ・ボドルム市展示の様子
（串本町提供）



子どもたちによる保存処理体験
（串本町提供）



トルコ記念館
（引き揚げ品展示風景）

香川県における海揚がり遺物の活用

【会場】 香川県埋蔵文化財センター

【主体】 香川県埋蔵文化財センター

【経緯】 昭和 48 年に開館した香川県立瀬戸内海歴史民俗資料館では、瀬戸内地方の歴史、民俗等に関する資料を収集している。収集資料には瀬戸内海海底から引き揚げられた遺物が約 80 点あり、常設展等で展示されてきた。平成元年から 2 年にかけて、同館では「海揚がり考古資料調査」を実施し、備讃瀬戸（岡山・香川県域）を中心とした瀬戸内海の家揚がり遺物の所在・出土地の確認、実測図作成、写真撮影等を行った。調査開始時、同館では海揚がり遺物を収蔵していなかったが、調査によって海揚がり遺物の実態が明らかになったことを受けていくつかの遺物を収集することとなった。なお、調査成果は『瀬戸内海歴史民俗資料館紀要』第 6・7 号にまとめられており、調査期間中の平成元年度には特別展「海底の文化財」も開催された。海揚がり遺物を中心に取り上げた県内では初めての展覧会である。同館に所蔵されてきた海揚がり遺物は、平成 26 年度、香川県埋蔵文化財センターに移管された。

【内容】 香川県埋蔵文化財センター保管資料の内訳は、弥生土器、古墳時代前期の土師器、古代の土師器、古代末～中世初頭の須恵器、中世後半の備前産陶器、古代以降の土錘となっており、出土地が判明するものはいずれも香川県域である。このうち九州南部の incoming II 式の弥生土器壺は、九州南部の土器が瀬戸内海を経て運搬されていた可能性を示す。古代末から中世にかけての土器は、十瓶山窯（香川県）や備前（岡山県）といった窯跡群を産地とする。各産地から瀬戸内海経由で搬出されていた状況を裏付けるのだろう。

現在、香川県埋蔵文化財センターでは、九州南部の弥生土器、備前産陶器を展示し、弥生時代や中世の交易について紹介している。今後、目録や各資料の調査成果を公表し、海揚がり遺物の活用に努める予定である。
(香川県教育委員会 乗松真也)



埋蔵文化財センター展示室



弥生土器壺

シンポジウム「KURAKIZAKI 2015 ー倉木崎海底遺跡の魅力をさぐるー」

【期間】 平成 27 年 8 月 29 日（土）・30 日（日）

【会場】 宇検村生涯学習センター「元気の出る館」 宇検村宇検集落

【内容】 倉木崎海底遺跡は、鹿児島県奄美大島宇検村の北西端にある枝手久島（無人島）と陸地との海峡の珊瑚礁が発達した水深 2~4mの浅い海底に立地する。出土品は主に 12 世紀後半~13 世紀の中国製の陶磁器である。博多遺跡群との関連性が指摘されていることから、中国から博多に向かう途上で誤って進入して座礁した船の積荷と考えられている。遺跡は平成 6 年に発見され、平成 7~10 年に文化庁の補助事業として、青山学院大学の協力を得ながら宇検村教育委員会が発掘調査を実施した。当時は水中遺跡の発掘調査事例が少なく、手探りの状態で進められたが、約 2,300 点の陶磁器が引き揚げられた。

平成 26 年度には、当遺跡が九州国立博物館による水中遺跡探査実験の調査地として選定され、様々な探査機器を用いての調査が実施された。これを契機に、発見から 20 年の月日が経過していたが、遺跡の「活用」について地域で考えていくことを目的としたシンポジウムを文化庁の補助事業として開催した。シンポジウムは 2 日間開催し、1 日目は 26 年度に行われた調査成果の報告や、アジアの沈没船や世界の水中遺跡の活用方法等、先進的な事例を紹介した。また「倉木崎海底遺跡の魅力とこれからの活用」と題して討論会も行った。来場者からは多くの質問が寄せられ、遺跡に対する住民の興味・関心の高さを知ることができた。

2 日目は活用の第一歩として、環境を活かした遺跡見学会を開催した。当遺跡の魅力は、透き通る海の底にあり、水深が浅いため船上から箱めがねなどを使って遺物を実見できることである。船上では、遺跡の特徴や周囲の環境を説明しながら参加者の質問等に対応した。また、同時に遺跡近くの宇検集落を対象に、港町として繁栄した歴史を踏まえ、航海の安全を祈願する神社や碇石等、水中遺跡と関わりのある陸上の文化遺産を、地域住民がガイドをしながら巡った。

水中遺跡の背景には交易や交流といった海上交通の歴史があり、それらのなかに遺跡を位置付けることによって、より詳しく理解することができる。海と陸の文化遺産を繋ぎながら、遺跡を身近に感じることができる活動を今後も進めていきたい。 （宇検村教育委員会 渡 聡子）



シンポジウム会場の写真展示



遺跡見学会の様子

特別展『水中文化遺産—海に沈んだ歴史のカケラ—』

【期間】 平成26年11月8日（土）～1月18日（日）

【会場】 沖縄県立博物館・美術館

【内容】 近年、琉球列島では国庫補助や民間助成を活用した悉皆調査が継続的に行われており、水中遺跡の位置や数、内容が把握され始めた。本特別展は、その成果を広く公開することを目的としつつ、一般にはいまだ耳に馴染みがない「水中文化遺産」や「水中遺跡」という単語そのものから、これまでの長い調査研究史の中で知られてきた日本の水中遺跡の実態まで、展示を通して普及・啓発することとした。展示空間は約810㎡、構成は1. 港、2. イカリ、3. 海難事故・沈没船、大交易時代、4. 異国船、5. 国内流通、6. 潮間帯遺跡、7. 生産遺跡、8. 調査方法と活用、からなる。琉球列島の水中遺跡を中心としつつ、各章のテーマにそって日本の代表的な水中遺跡も展示することによって、両者を比較できるよう配慮した。それは、琉球列島の水中遺跡が未だ分布調査段階での成果であるのに対し、日本の代表的な水中遺跡は1つの遺跡を対象に集中的な発掘調査と研究が行われており、その違いは両者を比較することによって明らかとなるからである。観覧者は現段階の琉球列島の水中遺跡の展示品に物足りなさを感じたかもしれない。しかしこの対比は、今後、琉球列島においてより詳細で集中的な調査・研究が行われた際に明らかとなる海からの歴史と文化、そして水中遺跡の可能性に期待を抱いてもらうために必要と考えた。

関連イベントとしては、ミクロからマクロの視点まで広く浅くを心掛け、1. 世界の水中遺跡、2. 日本の水中遺跡、3. 沖縄の水中遺跡、4. 史跡鷹島神崎遺跡の4回に講演会を分け、それぞれ専門の先生方に講師をお願いした。また、潮間帯遺跡や生産遺跡については、実際にそれらを干潮時に干上がった海で見る体験学習会を恩納村で実施した。さらに恩納村博物館では、琉球列島の成果に絞って巡回展を開催した。本展の来館者は9,586人。これは、当館が同時期に同規模で実施している特別展の来館者が平均5,000～6,000人であることを考慮すると、それを大きく上回る数であり、この「水中遺跡」に対する興味の高さと今後の可能性、保護・活用の重要性を表しているのではないだろうか。

(沖縄県埋蔵文化財センター 片桐千亜紀)



特別展展示風景



体験学習風景

九州国立博物館における水中遺跡常設展示

【期間】 平成 17 年～現在まで

【会場】 九州国立博物館 文化交流展示室（常設展示）

【内容】 四周を海で囲まれた日本は、海外の文化を取捨選択しつつ、それを日本流にアレンジしながら独自の文化を育んできた。九州国立博物館（以下「九博」という。）では国際文化交流を主要テーマとして位置付け、その象徴的な存在である水中遺跡や海事文化に関する展示を、平成 17 年の開館当初から継続的に実施している。

常設展示では、沖ノ島祭祀にみる大陸・朝鮮半島との交流や、遣唐使船の往路と復路における積荷の違いなどを展示しており、香木類に関してはその匂いを嗅げる展示も行っている。特別展示としては、南島の大型巻貝から日本文化を探る『南の貝のものがたり』や、日本列島各地の海神文化の源流を追究した『海の神々』などを平成 18 年度に大々的に実施した。

文化交流展示最大の目玉は、長崎県松浦市に所在する鷹島海底遺跡に関する展示である。実大に復元した組み合わせ式の碇の模型を中心に、引き揚げられた武器・防具・陶器類等をまとめた単体ケースと、「てつほう」に関する特注単体ケースが取り囲む。さらに開館時には、近接した壁付きケースに宮内庁三の丸尚蔵館所蔵の『蒙古襲来絵詞』の実物も展示し、蒙古襲来と鷹島海底遺跡の歴史的意義が一目でわかるように工夫した。

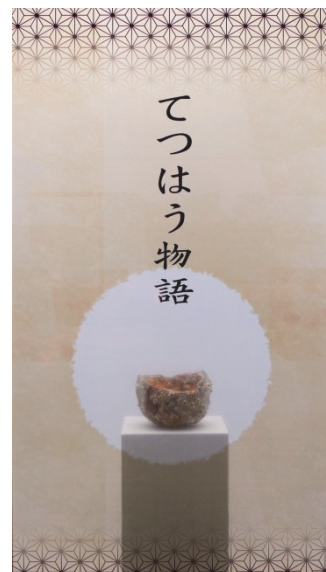
また、九博では、保存処理や自然科学分析を踏まえた展示を館の一つの特徴としている。『蒙古襲来絵詞』にも炸裂弾として描かれている「てつほう」は、X線 CT スキャンにより、内部に火薬と一緒に鉄片や陶器片を詰め込み、炸裂の効果を高める工夫がなされていることが判明した。そこで、実物の「てつほう」の背後に液晶画面を設置して、「てつほう」をめぐる歴史的意義や構造分析の結果を、アニメーションなどを駆使してわかりやすく伝える特注単体ケースを製作した。

現在、九博では、水中遺跡の探査手法や展示手法の検討を、海外の研究機関や博物館と連携しながら進めている。展示に関しては、水中遺跡保護の意義が来館者に伝わるように、さらなる追究を行ってきたい。

（九州国立博物館 佐々木蘭貞）



鷹島海底遺跡の展示



「てつほう」の展示

特別展『水の中からよみがえる歴史—水中考古学最前線—』

【期間】 平成 29 年 7 月 15 日（土）～9 月 10 日（日）

【会場】 九州国立博物館

【内容】 常設展示では、長崎県松浦市の鷹島海底遺跡の調査成果を紹介していることは本書 96 頁に示した。本特別展示はこの常設展示を導入とし、近接する企画展示室で水中遺跡総体を紹介する構成である。

導入部では、水中ロボットによって撮影された海底の映像のモニターを設置した。幻想的でもある青白い光線を使った照明は、水中遺跡の世界へ見学者を誘う目的で使用した。

次は、日本における水中遺跡のこれまでの調査成果の展示に移る。まずは、水中考古学に関する研究の歴史の紹介である。江戸時代に紀淡海峡の無人島である友が島で海揚がりの遺物があり、神社に保管されている事例を紹介した。また、日本における本格的な水中考古学研究の先駆けとなった遺跡として、明治時代の長野県諏訪湖で石鏃が発見された曾根遺跡、大正時代の滋賀県琵琶湖で縄文土器が発見された葛籠尾崎湖底遺跡を紹介した。沈没船ではなく湖底遺跡の調査が日本の水中考古学研究の先駆けとなった点は、諸外国とは異なる特徴である。

続いて、北海道から沖縄までの主要な水中遺跡の調査成果を展示した。北海道開陽丸や広島県推定いろは丸埋没地点遺跡等の沈没船関係遺物をはじめ、滋賀県西浜千軒遺跡の一石五輪塔を展示することで、水中遺跡には沈没船とともに集落が水中に沈んだ場合があることを示した。

メイン展示は、鷹島海底遺跡で発見された 2 号船の模型である。2 号船は船首から 12m ほどが遺存しており、詳細な復元が可能である。実際の船長は 20m と推定されている。船体は船底から約 70cm しか残っていないが、これは木造沈没船の多くはフナクイムシによる浸食で遺存状況が劣悪だったことを示している。

最後は木製品の保存処理コーナーである。出土木製品は保存処理を施せばほぼ同形同大を維持できるが、自然乾燥の場合は 25% ほど収縮する。保存処理の必要性を示した展示である。

水中考古学の研究成果の展示では、陸上の遺跡との違いを出すことに工夫を凝らす傾向が世界的に認められる。本展示においても「青白い」の光線を使いつつ、展示ケースの下部には堆積している砂をイメージした色を配色した。

夏休みということもあり見学者は多く、水中遺跡の重要性を多くの方に認識してもらう良い機会になったと考えている。なお、平成 29 年 8 月 26 日に同館にて一般向けシンポジウムを実施した。（九州国立博物館 佐々木蘭貞）



導入部分展示風景



鷹島 2 号船復元展示風景

「発掘された日本列島 2017」展 特集Ⅱ 「発掘された水中遺跡」

【期間・会場】

平成 29 年 6 月 3 日～7 月 23 日	東京都江戸東京博物館
平成 29 年 8 月 5 日～9 月 18 日	八戸市埋蔵文化財センター 是川縄文館
平成 29 年 9 月 30 日～11 月 5 日	三重県総合博物館
平成 29 年 11 月 18 日～12 月 24 日	安城市歴史博物館
平成 30 年 1 月 13 日～2 月 25 日	岐阜市立一支国博物館

【内容】 日本では現在、毎年約 8,000 件の発掘調査が行われている。しかし、新聞やテレビなどによってさまざまな報道がなされたとしても、広く国民が接することができる発掘調査の成果はごく一部である。そこで文化庁では、全国的に注目された発掘調査成果をより多くの方々に、できるだけ早く、わかりやすく伝えることを目的に、平成 7 年度から「発掘された列島」展を開催している。展示は、全国の旧石器時代から現代まで約 20 遺跡の速報展示と、他に 2 種類の特集展示によって構成される。今回、この特集展示の一つが「発掘された水中遺跡」である。

この「発掘された水中遺跡」では、地殻変動により水没した粟津湖底遺跡（滋賀県・縄文時代）、沈没船の積載物や船舶から投棄された積載物からなる相島海底遺跡（福岡県・古代）、倉木崎海底遺跡（鹿児島県・中世）、史跡鷹島神崎遺跡（長崎県・中世）、神津島沖海底遺跡（東京都・近世）、漁業関係者が引き揚げた瀬戸内海の高揚がり遺物（香川県・弥生時代から中世）、箱館戦争関連の開陽丸（北海道・近代）の 7 遺跡を取り上げている。

展示内容は、開陽丸を模した展示台を展示室の中心に据え、「発掘された水中遺跡」の導入部の壁面を水中遺跡のさまざまな調査風景写真で飾った。また、水中遺跡の調査方法を紹介するパネルコーナーを設けるとともに、映像コーナーでは史跡鷹島神崎遺跡から出土した「てつほう」（元軍が使用した炸裂弾）の構造を分析した 3 分の動画を放映した。一般の来館者にとって水中遺跡は馴染みの薄い分野であるため、出土品の展示だけでなく展示手法の工夫が重要である。なお、ポスターやチラシでは、珊瑚に埋もれる倉木崎海底遺跡を使用した。



「発掘された日本列島 2017」展ポスター



開陽丸を模した展示台

平成 28 年度日中韓文化遺産フォーラム「水中文化遺産の保護と活用」

【趣 旨】 中国・韓国並びに日本の水中文化遺産の保護等に係る専門家により、各国の保護の技術と経験、法的枠組等について意見交換や情報の共有を行うことで、日中韓3カ国における水中文化遺産の保護・継承の活性化につなげ、今後の国際的な協力体制確立を促進するものである。

【主 催】 文化庁・九州国立博物館

【日 時】 平成 29 年 2 月 12 日 講演・討論会（九州国立博物館ミュージアムホール）

平成 29 年 2 月 13 日 エクスカーション（長崎県松浦市史跡鷹島神崎遺跡）

【内 容】 2 月 12 日は、およそ 200 名の参加者（同時通訳あり）があり、水中遺跡への関心の高さが伺えた。各国 2 名ずつの専門家による講演を実施した後に討論会も行った。

【講 演】・「韓国における水中文化遺産の保護と活用の取り組みの歴史」

李 貴永（国立海洋文化財研究所長）

1976 年の「新安沈没船」発見を契機に、韓国の水中考古学が国家的な事業として体制整備の強化が図られた過程と、今後の課題について言及された。

・「新安沈船にみる活用とその意義」

金 炳堇（国立海洋文化財研究所学芸研究官）

「新安沈没船」発掘が、東アジアの中世における造船技術、社会・経済・美術工芸等の解明に対してもつ意義や、日中韓の交流史のシンボルであることが認識された。

・「中国の水中文化遺産の保護と活用の体制」

刘 丽娜（西南交通大学副教授）

中国での水中文化遺産の保護の管理体制とシステムの構築や人材育成の歴史が紹介され、併せて日中韓の戦略的共同研究についての提案がなされた。

・「南海 1 号沈没船の引き上げと今後の活用について」

孙 键（国家文物局水下文化遺産保護中心研究員）

南宋時代の大型沈没船「南海 1 号」を周囲の砂ごと大型コンテナで引き揚げた経緯や、「海上シルクロード博物館」での保存の取組が紹介された。



孙 键氏による講演のようす



討論会のようす

・「日本の水中遺跡保護・活用の現状と課題」

禰宜田 佳男（文化庁文化財部記念物課主任文化財調査官）

日本での水中文化遺産の保存と活用の体制整備の状況について、陸上の埋蔵文化財の保護との比較や、史跡鷹島神崎遺跡の取組等をまじえて紹介された。

・「鷹島海底遺跡における水中考古学調査の歴史」

池田 榮史（琉球大学法文学部教授）

蒙古襲来による元軍の沈没船が発見された鷹島海底遺跡での調査研究と、その歴史的意義が紹介され、各国の連携を視野に日本の体制整備の充実が指摘された。

【討論会】 赤司善彦（福岡県教育庁総務部副理事兼文化財保護課長）をコーディネーターに、佐々木蘭貞（九州国立博物館アソシエイトフェロー）も参加して、討論会を開催した。

討論会では、水中文化遺産の魅力や東アジアの水中遺跡の特質、また各国の保護体制の違いについても意見交換がなされた。さまざまな課題はあるが積極的な公開・活用を通して水中文化遺産の意義と保護の必要性をそれぞれの国民に知ってもらい理解と協力を得ることが必要であることが確認できた。また、国際協力の必要性、特にデータベース等の水中文化遺産に関する基本情報を共有することが、水中文化遺産の価値をよりよく理解するために欠かせないものであり、日中韓の文化交流の歴史を紐解く上でも重要であることも確認された。

【エクスカーション】

訪問先 松浦市立鷹島歴史民俗資料館 松浦市立鷹島埋蔵文化財センター

内容 2月13日のエクスカーションには、中国・韓国の招聘者とともに日本の関係者を加えた18名が参加。

松浦市による史跡鷹島神崎遺跡の沿革と整備計画の概要について説明を受けて、併せて質疑応答を行った。その後、出土遺物の保存処理や資料での展示について視察した後、共同討議が行われた。討議では、簡単に見ることのできない水中遺跡の活用方法や観光施設とのタイアップなどについて意見交換がなされた。



松浦市の担当者による概要説明



松浦市立鷹島歴史民俗資料館の展示視察